第3章　共助による地域除雪に関する実証実験

3－1　山形県尾花沢市宮沢地区（市野々、岩谷沢）における実証実験

第 2 章の集落の雪処理に関する対応方針に基づき、山形県尾花沢市宮沢地区において、共助による地域除雪の実証実験を実施した。実験の内容及び結果等を本節にて整理する。

（1）対象地域の状況

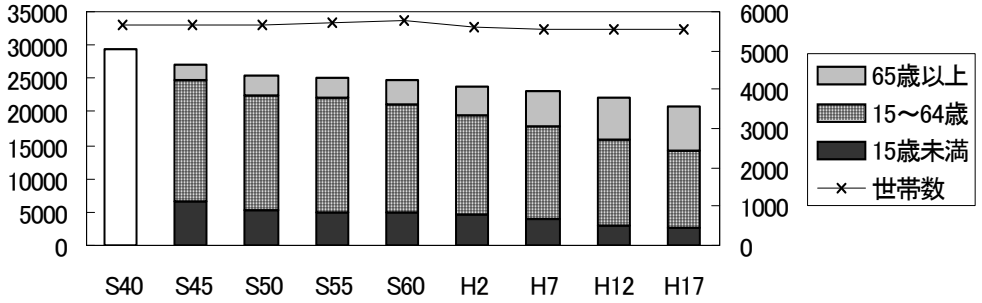
山形県尾花沢市宮沢地区は、積雪が 2mに達することもある豪雪地であり、17 地区（約 700 世帯、約 2,600 人）で自治会を組織している。自治会の運営は区長会が行い、宮沢地区公民館 3 名の常駐職員が各種団体の活動を支えている。公民館では、「元気な地域づくり」をスローガンに掲げ、イルミネーション飾り、フラワーロードなど、様々な地域おこし事業が行われている。尾花沢市の中でも最も地域活動の活発な地区の一つであり、地域のまとまりも強い。

宮沢地区では、自然落雪型の克雪住宅が普及しており、家屋全体の屋根雪下ろしを行う世帯は少ないが、小屋や車庫、家屋の一部等で雪下ろしが必要となる世帯は多い。家屋が大きく、敷地も広いため、小型除雪機や重機を所有している住民が多く、機械による除雪作業が一般的である。高齢者世帯も増えてきており、自分たちで自宅の雪処理ができない世帯は、家族（子ども）が週末に来て除雪をしている。なお、宮沢地区内ではこれまでに除雪作業中の事故は発生していない。

図表 3－1　山形県尾花沢市の概況

■尾花沢市　市町村データ		位置図
特別豪雪地帯指定	全域	
過疎地域指定	全域	
人口（H17）	20,695 人	
高齢者割合（H17）	31.1%	
世帯数（H17）	5,549 世帯	
冬期間累計降雪量	977cm（H18 冬期） 815cm（H20 冬期）	
年間最大積雪深	235cm（H18 冬期） 172cm（H20 冬期）	
集落数	94 集落	

人口及び世帯数の推移



注）・人口、高齢者割合、世帯数は、平成 17 年国勢調査に基づく。
・冬期間累計降雪量及び年間最大積雪深（平成 18 年冬期、平成 20 年冬期）は、豪雪地帯基礎調査に基づく。
・集落数は平成 22 年 3 月時点の値。

宮沢地区では、公民館や集会所などの共有施設については、自治会単位で雪の積もり方を見ながら一斉に除雪作業を行っているが、自宅の雪処理は各自で行っており、地域で一斉にという取組や意識はあまりない。

平成 19 年度、山形県が安全な雪下ろしに関するパンフレット及び DVD を作成するにあたり、宮沢地区に協力を求めたことから、宮沢地区雪プロジェクトが組織され、安全な雪下ろしの方法について検証したり、地元で普及に努めるなどの活動を行ってきた。

このような状況を踏まえ、平成 20 年度、「雪害による犠牲者発生の要因等総合調査」（国土交通省・内閣府）において、犠牲者防止対策の試行実験の一つとして、共助による一斉除雪実験の実施を国から宮沢地区に依頼し、尾花沢市宮沢地区のうち行沢地区（48 世帯、181 人）と中島地区（59 世帯、235 人）を対象に、地区主体の雪害事故防止に資する地域コミュニティ活動として実験を実施した。この実験が契機となり、地域で助け合い、見守り合いながら、雪処理中の事故がない地区をつくろうという機運が芽生えつつあるところである。

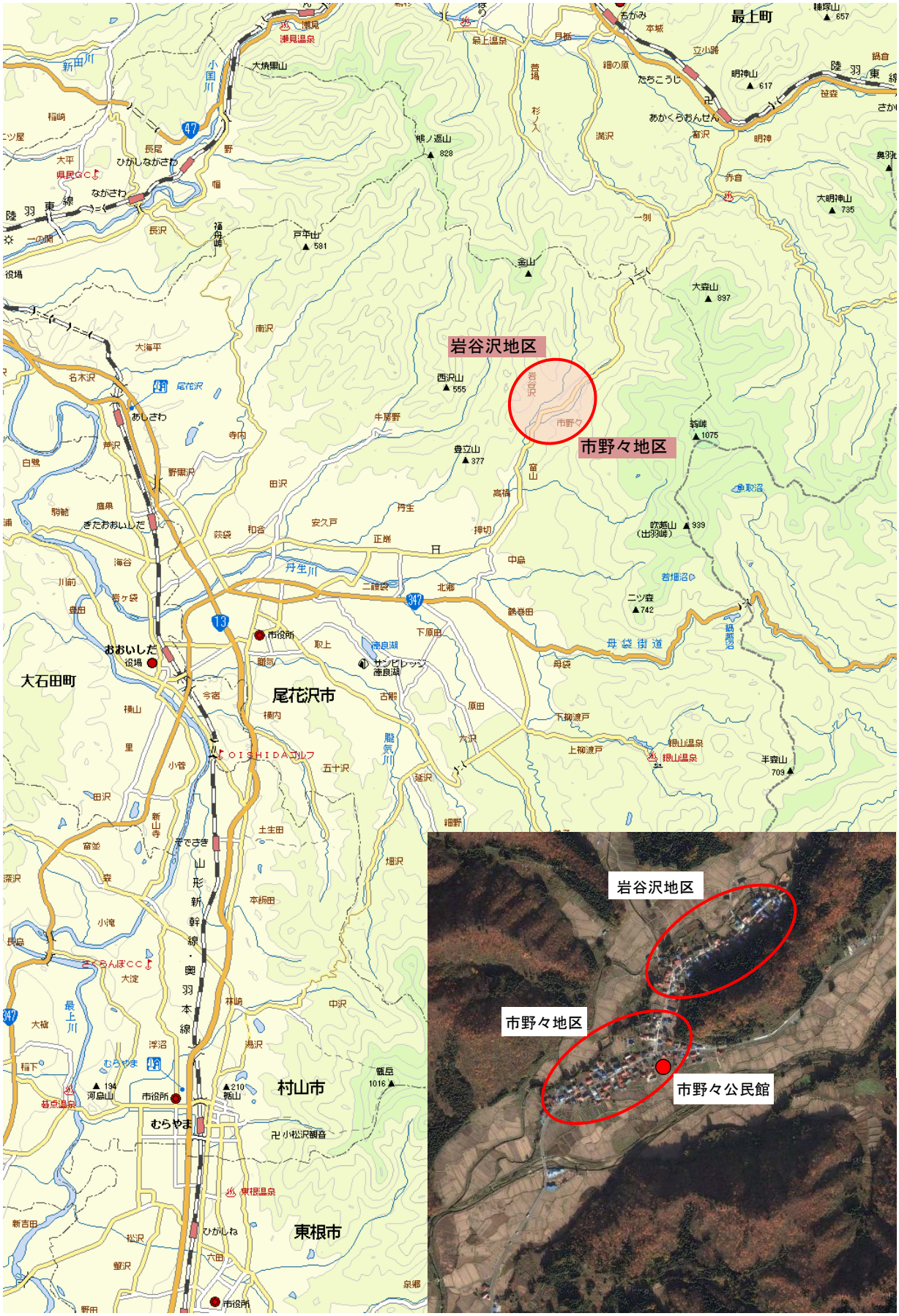
本調査における共助による地域除雪の実証実験では、宮沢地区内の市野々地区（いちのの、34 世帯、116 人）と岩谷沢地区（いわやさわ、33 世帯、121 人）で実施した。概況は**図表 3－2** に示すとおりである。また、**図表 3－3** のとおり、両地区は隣接している。市野々集落は県道 28 号線（主要地方道尾花沢最上線）沿い両脇に民家が立ち並ぶ。同じく岩谷沢集落は市道沿い両脇に民家が立ち並び、地形的な末端集落である。

図表 3－2　尾花沢市宮沢地区：市野々地区・岩谷沢地区の概況

項　目	市野々地区（いちのの）	岩谷沢地区（いわやさわ）
地域区分	山間地	山間地
集落類型	基礎集落	基礎集落
人口	116 人	121 人
高齢者割合	31.9%	37.2%
世帯数	34 世帯	33 世帯
うち高齢者世帯数	9 世帯	5 世帯
平年の積雪量	約 180cm	約 180cm
市役所までの距離	約 10km	約 10km

注）人口、高齢者割合、世帯数、高齢者世帯数は、住民基本台帳 H22.2.1 時点に基づく。

図表 3－3　尾花沢市宮沢地区：市野々地区・岩谷沢地区の位置



(2)実証実験の実施内容

①本実験の趣旨

平成 20 年度に国土交通省都市・地域整備局で作成した「共助による地域除雪の手引き ～安全・効率的な雪処理方策マニュアル～」を参考に、尾花沢市宮沢地区内の市野々地区及び岩谷沢地区（雪処理の担い手が比較的多く、地域活動も活発な地域）において、あらかじめ活動日を定め、地域住民が協力して、大人数で一斉に高齢者世帯の家屋周辺を除雪することにより、除雪作業における安全性・効率性の向上及び地域防災力の向上等を図る。また、活動後には、アンケート調査及び意見交換会を実施し、実験の効果や課題等を把握・検証するとともに、今回の成果を共助による地域除雪の手引きの改訂に反映させる。

＜本実験の主な検証項目＞

・地域における準備・調整の手順
・関係機関との連携体制、実施体制及び役割分担のあり方
・安全管理係（事故が起きないように安全に気を配る人）の必要性
・安全かつ効率的な除雪活動のためのポイント
・参加者（住民）の視点からみた共助による地域除雪の効果・評価
・活動の継続に向けた課題、今後の方向性　　等

②実施体制

宮沢地区では、共助による地域除雪の実施主体として、地域の各種団体（区長会、市民グループ、公民館）からなる「宮沢地区安全な雪下ろし実行委員会」（以下、実行委員会）を組織するとともに、市野々地区及び岩谷沢地区、地元消防団、尾花沢市及び山形県と連携し、**図表 3-4** のような実施体制と役割分担を構築した。

図表 3-4　宮沢地区における共助による地域除雪実験の実施体制

主　体	主な役割
宮沢地区安全な雪下ろし実行委員会	実験の実施主体
宮沢地区区長会	まとめ役、各地域組織への協力要請、住民への周知
宮沢地区雪プロジェクト	安全管理係（当日作業の安全確保、声かけ、見守り）
宮沢翁塾	事務スタッフ
宮沢地区公民館	庶務、救護、会議場所の提供、安全帯等装備の管理
尾花沢市民雪研究会	本実験の企画、連絡調整窓口
市野々地区、岩谷沢地区	当日の地域除雪活動（区長が現場責任者兼安全管理係）
地元消防団	当日の交通誘導
尾花沢市（総務課・企画課・建設課）	会議への出席、記録　　（オブザーバー）
山形県（村山総合支庁北村山総務課）	会議への出席、資料印刷　　（オブザーバー）

③実施日時・スケジュール

共助による地域除雪実験の実施日時及び当日スケジュールは、以下のとおりであり、実行委員会で協議した結果、地域住民が集まりやすい日曜日の午後に設定した。

○実施日：平成 22 年 2 月 21 日（日）
○時　間：12:45～16:00
・12:45～13:00　開会〈市野々公民館にて〉
・あいさつ（実行委員会会長）
・作業内容の確認並びに注意事項（宮沢地区雪プロジェクト）
・13:00～14:00　一斉除雪作業〈屋外にて〉
・市野々地区の高齢者宅（3 世帯）
・岩谷沢地区の高齢者宅（1 世帯）
・14:15～16:00　意見交換会〈市野々公民館にて〉
・「安全な雪下ろし作業」DVD（山形県製作）の上映
・テーマ別意見交換（分科会・全体会）

④実施までの準備

実験の実施にあたり、平成 21 年 12 月に実行委員会の主要メンバーが集まり、実施するかしないか、何を目的にどのような取組を行うか、どの地区で実施するかなどを協議し、実施する方向で調整を進めることを確認するとともに、市野々地区と岩谷沢地区を実施個所の候補と定めた。

平成 22 年 1 月には、市野々地区及び岩谷沢地区の区長、地域リーダー等に対して、実行委員会主催による説明会を開催し、尾花沢市及び山形県の担当者も交えて意見交換及び合意形成を図り、地元の了解を得て実験の実施が決定した。

実施当日までに、実行委員会及び市野々と岩谷沢の両区長で適宜協議し、当日の進め方、役割分担、会場の確保、道具の用意、案内チラシや配布資料の作成等を進めるとともに、両地区の区長を通して地域住民に実験への参加を呼びかけた。

また、実験を効率よく進行するため、実行委員会で事前に地域住民の参加者を把握し、除雪作業の班分けを行った上で当日の活動に臨んだ。

実行委員会メンバーによる事前協議

実施地区の代表・リーダーへの説明会

⑤実験当日の活動

共助による地域除雪実験の当日、参加者は市野々公民館に集合し（地域住民約 30 人、実行委員会メンバー、行政関係者など、合計約 50 人）、最初に作業内容や注意事項を確認した。なお、参加者は除雪用具（スコップ、スノーダンプ）を持参し、ヘルメットを着用している。

開会のあいさつ

作業内容や注意事項を聞く参加者

その後、1 班 15 名程度で 2 班に分かれ、市野々地区及び岩谷沢地区の作業現場に移動し、各班の現場責任者（区長）の指示の下、声をかけあいながら、高齢者世帯の家屋周辺の除雪作業を行った。岩谷沢地区では、実施個所の積雪が多かったため、地域住民が所有する重機 3 台を活用して効率的に作業した。

また、作業の安全確保（声かけ、見守り等）を担う安全管理係をそれぞれの現場に複数名配置し（宮沢地区雪プロジェクトのメンバー、市野々・岩谷沢の両区長が担当）、事故の発生防止を心がけた。作業現場には一斉除雪を行っていることを示す旗を立てることで、活動を PR したり、地域の連帯感や安全意識の向上を図っていた。

高齢者宅周辺の一斉除雪作業（人力）

高齢者宅周辺の一斉除雪作業（機械力）

一斉除雪を示す旗

消防団による交通誘導

適宜休憩しながらの作業

1 時間程度で作業を完了し、各班ごとに後片付けを行った後、再び市野々公民館に集合。山形県村山総合支庁で作製した「安全な雪下ろし作業」（DVD、30 分程度）を上映し、参加者で雪下ろし作業時の注意事項、安全帯や命綱の使い方などを確認した。この DVD は、宮沢地区雪プロジェクトのメンバーが協力・出演しているものの、地域住民の多くは視聴したことがなかったため、安全に雪下ろしを行うためのコツがわかったと好評であった。

安全管理係が見守りながらの作業

DVD 上映の後、参加者は「今日の実証実験の効果について」、「地域の共助で雪害による事故を防ぐためには」、「除雪機等使用時の注意事項とは」という 3 つのテーマに分かれ、行政職員の進行の下、活発に意見交換を行い（分科会）、最後にテーマ別に意見交換の結果報告を行った（全体会）。参加者は共助による地域除雪の意義や必要性、除雪作業の安全確保について認識を深めることができた。

3 テーマに分かれての意見交換（分科会）

テーマ別の結果報告（全体会）

（3）実証実験の結果

①参加者アンケート調査の結果

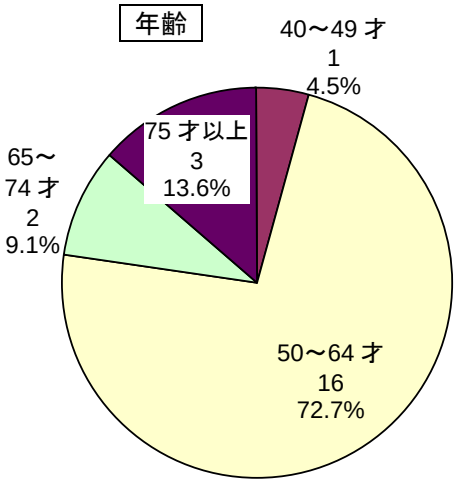
共助による地域除雪実験に参加した地域住民を対象に、活動の満足度や効果、実施体制や役割のあり方、今後の意向等を把握するため、以下のとおり、アンケート調査を実施しており、結果について整理する。

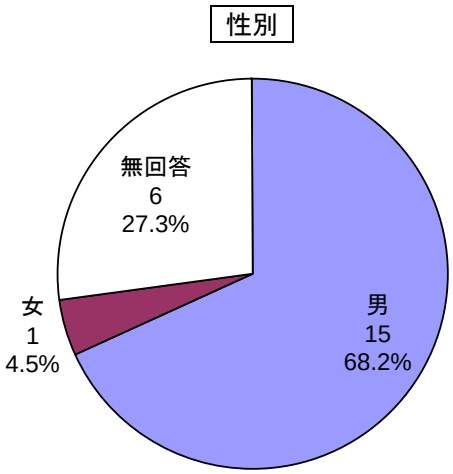
【調査概要】
- 調査期間：平成 22 年 2 月 21 日（実験日）～3 月上旬
- 調査方法：共助による地域除雪の実験日に参加者に調査票を配布。回答した調査票は区長を通じて回収し、実行委員会でとりまとめて一括で返送。
- 調査対象：実験に参加した市野々地区、岩谷沢地区の住民　約 30 人
- 回 収 数：22 人

【調査結果の要点】

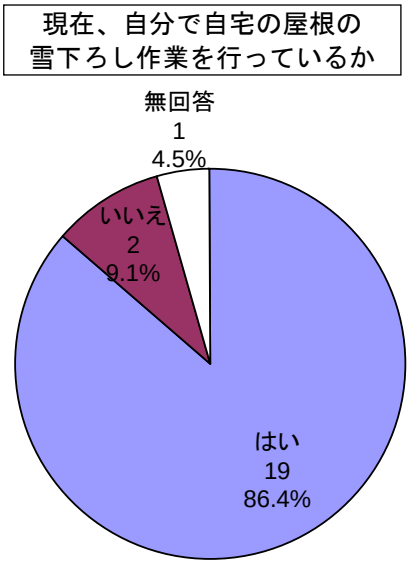
- 年齢は 7 割以上（72.7%）が「50～64 才」であり、65 歳以上は約 4 分の 1。（**図表 3－5**）
- 屋根の雪下ろしは 9 割近く（86.4%）、自宅まわりや玄関先の除雪は全員が行っている。作業中の人数をみると、屋根の雪下ろしでは 7 割近く（68.4%）、自宅まわりや玄関先の除雪では約 8 割（81.8%）が「同居の家族と」作業している。（**図表 3－6**）
- 今回の活動に対して、「満足」と「やや満足」が半数（50.0%）ずつであり、不満とする回答はなかった。（**図表 3－7**）
- 地域除雪の効果として、「地域の連帯感やまとまりが向上した」が「十分に効果があった」と「やや効果があった」を合わせて 9 割以上（95.4%）と最も多く、次いで「除雪作業の安全性が高まった」（86.3%）、「地域の雪問題への関心が高まった」（77.3%）となっている。すべての効果項目に対して「効果がなかった」という回答は 1 件のみである。（**図表 3－8**）
- 今後も活動を「続けていきたい」とする人が 8 割以上（81.8%）を占める。一方、活動を続けていく場合に問題（課題）になることとして、9 割以上（95.5%）が「地域の高齢化が進み、活動の参加者や担い手が不足する」をあげている。（**図表 3－9**）
- 事前にメンバーで役割を決めておくことについて、「必要である」が半数以上（54.5%）、「必要はない」とする回答は約 1 割（9.1%）であった。（**図表 3－10**）
- 関係機関・団体との連携が「必要である」とする人が 6 割以上（63.6%）であり、連携の必要性は比較的高い。連携相手としては、市町村、市民団体、社会福祉協議会、警察署があげられている。（**図表 3－10**）
- 事故が起きないように安全に気を配る人（安全管理係）の配置については、「必要である」が 8 割以上（86.4%）であり、「必要はない」とする回答はなく、重要な取組であることがわかった。気配りの内容は、声かけ、救助手段の確保、旗や看板等の設置、屋根雪の監視、交通整理などが挙げられている。係の配置方法は、「除雪作業を行う前に話し合って担当者を決める」が 8 割以上（84.2%）であり、「必要な知識やスキルを学び事前に登録しておく」は 1 人だけであった。（**図表 3－11**）

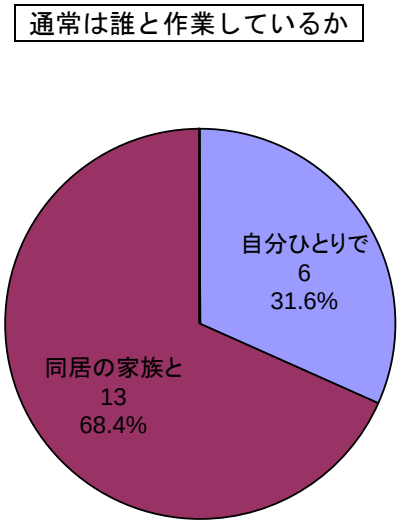
図表 3－5　回答者の属性（宮沢地区実証実験）

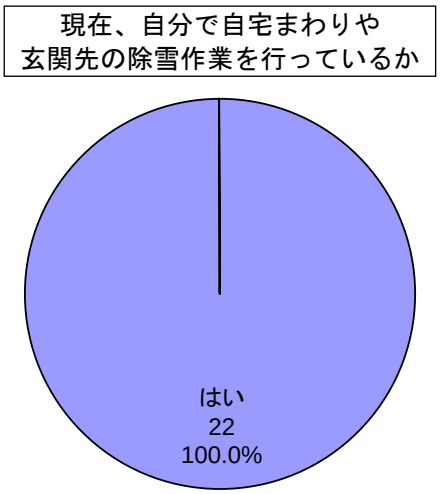


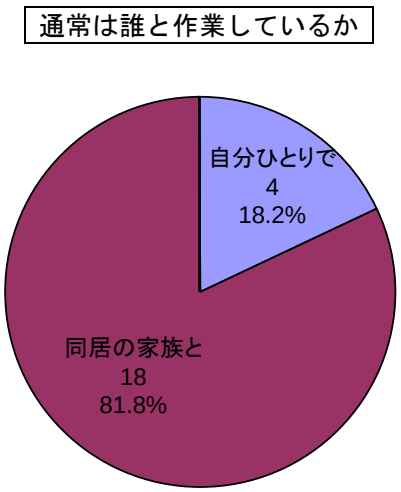


図表 3－6　自宅の除雪状況（宮沢地区実証実験）

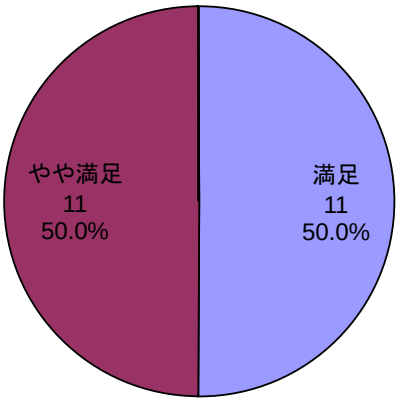




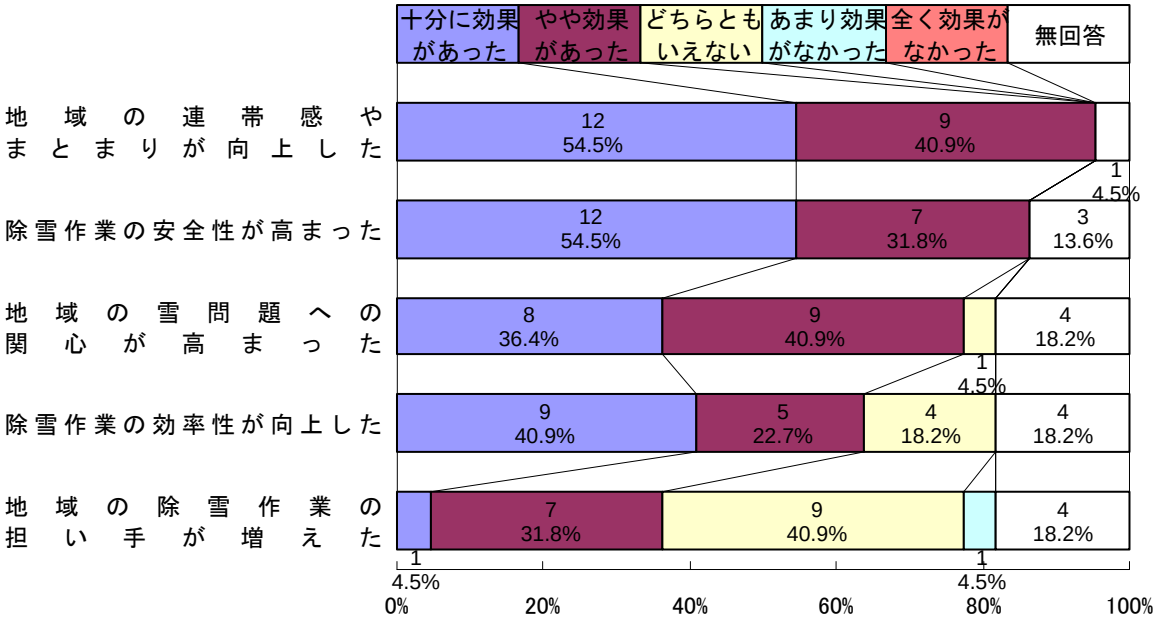




図表 3－7　活動の全体的な満足度（宮沢地区実証実験）



図表 3－8　地域除雪の効果（宮沢地区実証実験）

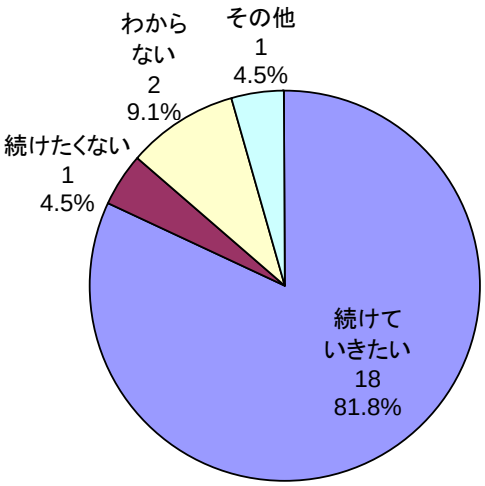


【その他の効果】

・今回の活動によって、雪処理や屋根の雪下ろしの安全性に関心を持つようになったと思う。
・地域全体での除排雪等の手助けの意識が出てきた。

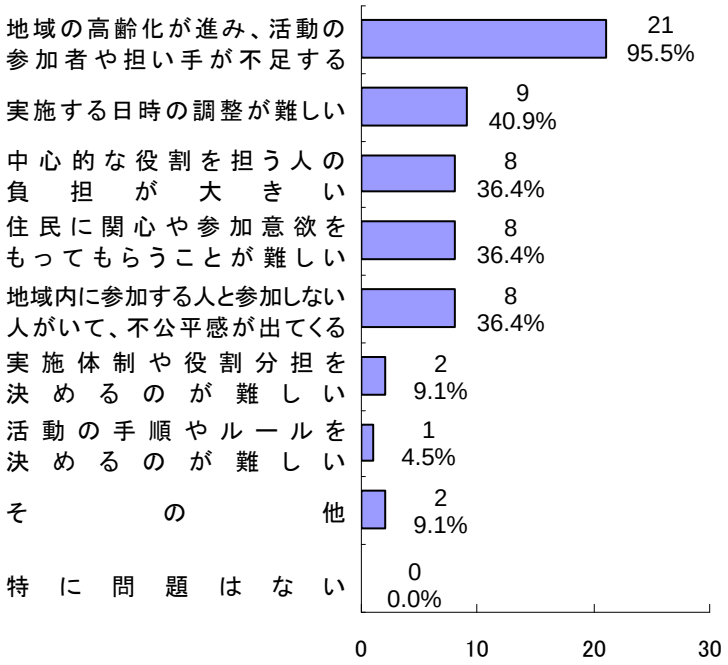
図表 3－9　活動継続の意向と問題点（宮沢地区実証実験）

今後もこのような活動を続けていきたいか



【「その他」の内容】
・続けていきたいが人手がない。

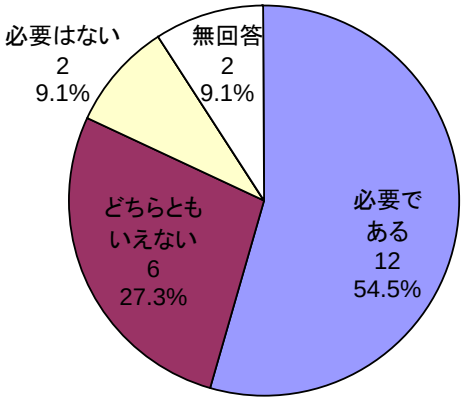
活動を続けていく場合、問題（課題）になること



【「その他」の内容】
・高齢化が進むにつれ、まず住民が参加意欲を持つように、中心的な立場にある人が導いていくことが大切になると思う。
・担い手の確保と後継者育成。

図表 3－10　実施体制・役割の必要性（宮沢地区実証実験）

住民が協力しながら除雪作業を行う場合、メンバーで役割を決めておくことの必要性

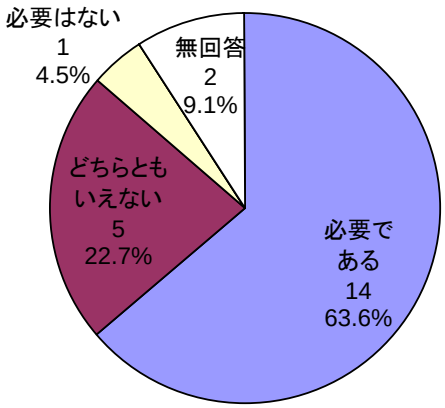


【必要な役割（「必要である」と回答）】
- 除雪作業者（2）、監視員（4）、責任者
- 除雪機を使用する場合、運転に慣れている人を充てる。

【「どちらともいえない」の理由】
- 高齢化が進むため難しい問題である。（2）
- 作業内容によって役割を分担するとは思うが、危険ではない作業など、特に必要のない場合もあると思う。
- 役割を決めておくと自分の役をこなせばよいという考え方が出てくると思うので、交代制にして話し合いながら行う方が能率が上がると思う。

【「必要はない」の理由】
- 何人かで作業する場合、いろいろな状況が考えられるため、その都度現場で話し合って、適切な人を配置し、安全第一で行うべきである。
- ボランティア活動に参加できる人の事前の把握が難しく、当日にならないと参加者が分からないため。

住民が協力しながら除雪作業を行う場合、関係機関・団体との連携の必要性



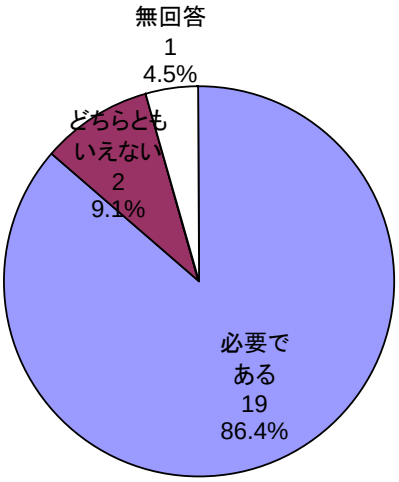
【連携が必要な機関・団体（「必要である」と回答）】
- 市町村（4）
- 市民団体（3）
- 社会福祉協議会（2）
- 警察署（1）
- 集落の共同除雪作業では、事故が起きた場合のことを考え、事前に消防機関に予定を知らせておく。
- 活動が軌道に乗るまでは雪下ろし実行委員会や、福祉関係でも高齢者宅の作業を行う場合などに見守ってもらえると、住民も関心を持つようになると思う。

【「どちらともいえない」の理由】
- 日常の除雪作業ととらえているので、住民の連携だけでいいのではないかと思うが、関係機関や団体との連携でメリットがあれば捨てがたいとも思う。
- 流雪溝のない地区などでは排雪等のお願いをすることになるのではないか。

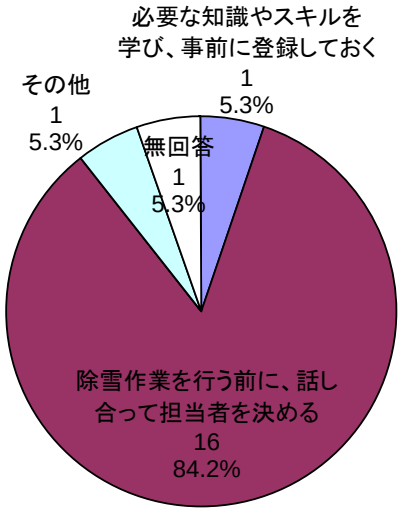
【「必要はない」の理由】
- 軒下で除雪作業をするとき、役割分担をしておけば市町村などと連携する必要はない。

図表 3－11　安全に気を配る人の配置（宮沢地区実証実験）

住民が協力しながら除雪作業を行う場合、事故が起きないように安全に気を配る人の配置の必要性



安全に気を配る人を配置する場合の方法（前問で「必要である」と回答した人を対象）



【気配りの内容（「必要である」と回答）】

・小さな当たり前のことでも声に出して注意する。
・中心的な役割の人を配置する。
・雪処理作業は危険度が高く、事故が起きた場合の救助の手段は常に備えておくべきであり、区長等を仮にでも配置するべきだと思う。
・第三者による見守り。
・雪片づけ場所の位置標示看板等の設置等。
・交通事故や屋根雪の落雪への注意、適切な作業人員の配置（年齢、男女別）。
・屋根からの落雪対策、体力や年齢等を考えた人員の配置と作業内容、交通整理（必要に応じて）、のぼり旗等の作業中であることが分かる注意喚起の方法、準備体操。
・除雪場所の全体を見てもらえれば、安心して作業ができると思う。
・屋根雪の状態や交通整理等を監視する必要があると思う。

【「どちらともいえない」の理由】

・集落住民が毎年減少していく中で、困難になってくると思う。
・そうした役割の人がいるにこしたことはないが、その余裕もないと思われるため、作業中は互いに気を配るようにする。

図表 3-12　自由意見（宮沢地区実証実験）

・活動する場合は、必ず中心的な役割を担う人が必要になり、区長が適任だと思う。共助の作業は、危険性が少なく、効率も上がるため必要な活動だと思う。安全に気を配る人を配置する際には、ある程度は必要な作業知識を持っている人に担当してもらうべきである。
・自主防災組織等の役割の活用。
・協力（ボランティア）なので、全員の参加意欲の向上を目指すのは難しいのではないか。
・除雪には危険が伴うので、ボランティア保険等の加入が必要と考える。
・今年の経験を出発点にして、住みやすい地域づくり、安全な集落づくりのシステムができればと考えている。
・今回の取組はとても意義あるものと感じる。できれば参加対象を全村民にして、実験等の目的を知ってもらうと、地域の共生、共助等の認識がより強まってくると思う。形式にとらわれない取組であってほしい。
・集落ごとに除雪を行っている目印ののぼり旗を、家の前のみんなが見ることのできる場所に立て、除雪を終えたら家に持ってくる。
・除雪の安全性、事故防止、助け合い、地域の連帯感が高まった。今後も安全な雪下ろし、雪かきの実証実験を続けたい。

②参加者による意見交換会の結果

実験当日に行った意見交換会（分科会及び全体会）で出た意見をテーマ別に整理（抜粋）すると、以下のとおりである。

テーマ①：今日の実証実験の効果について

・一人での作業は大変だが、大勢で行うと効率がよく、効果も上がることを実感できた。
・複数人で作業を行う場合、安全管理に気を配る必要があり、安全管理係の役割も重要である。
・機械をうまく使うことで作業が格段に進むが、経費の面で行政の後押しもあれば助かる。
・事前の段取りを区長だけに頼っていては長続きしない。
・良い取組であることは体験して理解できたが、今後、地区で継続するかについてはこれから話し合っていきたい。
・自主防災組織の強化が必要ではないか。
・隣近所への目配りという点では効果的であるが、いかに各自の負担を少なく抑え、実行するための組織をつくり、意識の向上を図っていくかが今後の課題である。

テーマ②：地域の共助で雪害による事故を防ぐためには

・実際に各家庭で雪処理を行う場合は、一人で行うのではなく、近隣で時間を合わせて声を掛け合いながら行い、危険性をなくすべきである。
・のぼり旗やカラーコーンを設置し、周囲に除雪作業中であることを伝えることは大事である。もしそのままになっていた場合、何かあったかもしれないと分かるのではないか。
・安全性を高めるために反射服や目立つ服装で作業するようにする。
・早朝からの作業は、体に負荷がかかるので気を付けるべきである。
・人によって除雪時間帯はバラバラである。週末に用事のある人もいるため、同じ時間に行うのは難しいのではないか。
・除雪作業を行っていることがお互いに分かるように、注意深く緊張感を持って確認し合うことが大切である。
・高齢者など除雪作業が難しい場合は自分から意思表示をすることも大事である。その場合、普段から地域に関わっていることが大切である。

テーマ③：除雪機等使用時の注意事項とは

・ロータリーを停止させても惰性で回転しているため、完全に止まったことを確認してから対処する。
・軒下付近は雪が安定していないので、除雪機をバックさせる際に上下に揺られて危険なときがある。
・後ろに注意が行き届かず、除雪機と建物や木などにはさまれることがある。
・除雪作業時も屋根からの落雪に注意が必要である。
・子どもが近くにいるときは絶対に作業を中止し、子どもを屋内等の安全なところに移動させてから作業する。
・現在の除雪機は安全装置が付けられているが、安全装置を切っている人がいる。
・取扱説明書を確認する。購入時に販売店から安全作業についてよく説明を受ける。
・メーカーによる除雪機安全協会もあるので、もっと PR することも必要ではないか。

(4)実証実験の成果と今後の課題･方向性

尾花沢市宮沢地区（市野々、岩谷沢）で実施した共助による地域除雪の実証実験について、本節で整理した内容に基づき、地域住民、地域コミュニティ、行政（市・県）のそれぞれの立場から成果（効果）を整理すると、**図表 3－13** に示すとおりである。

図表 3－13　各主体の立場からみた実証実験の成果（効果）

主体	実証実験の成果（効果）
地域住民	・1 人で除雪作業することの危険性、共助による地域除雪の意義、必要性を実感することがきた。 ・除雪作業の安全性が高まった（効果ありが 86%）。雪処理の安全性に関心をもつようになった。 ・地域の雪問題への関心が高まった（効果ありが 77%）。 ・除雪作業の効率性が向上した（効果ありが 63%）。大勢で行うと効率がよく、効果も上がることを実感できた。 ・除雪機械の使用に際しての注意事項を確認することができた。
地域コミュニティ	・地域の連帯感やまとまりが向上した（効果ありが 95%）。地域防災力の向上に寄与した。 ・地域の雪問題について住民どうしで話し合うよい機会・場ができた。 ・除雪が困難な世帯等を地域全体で支えていこうという機運が生まれた。 ・宮沢地区で 2 カ年にわたり地域除雪実験を行うことで、運営ノウハウが蓄積され、関係機関とのネットワークも構築されてきた。 ・活動に必要な道具・備品類（ヘルメット、スコップ、スノーダンプのぼり旗、ロープ、安全帯、軍手など）がそろってきた。 ・新聞報道されることで、地域活動の PR ができた。
行政	・尾花沢市では、宮沢地区の取組が雪問題の解決に向けた一つの実践モデル（地域主体の共助除雪モデル）となり、市内全域に広めていく足掛かりにできる。山形県でも同様に、県内に広めていくためのモデル事例となる。 ・山形県では、県で製作した「安全な雪下ろしに関する DVD」を活用・普及するよい機会となった。 ・活動の定着化を図ることにより、雪害による犠牲者防止に寄与する。

また、本実験を通して、豪雪地帯において共助による地域除雪を推進する上で、次のような知見を得ることができた。

＜共助による地域除雪を推進する上での主な知見＞

- 雪処理の担い手が比較的多く、地域活動も活発な地域において、共助による地域除雪を推進するための効果的な手法を検証することができた。
- 実施体制を構築する上で、自治会等の地域自治組織を中心に、市や県、市民団体等の関係機関と連携することの必要性を検証することができた。
- 事前に役割分担を決めておくことの必要性を検証することができた。
- 安全管理係（事故が起きないように安全に気を配る人）を配置し、その必要性・重要性、望まれる具体的内容、配置の方法（作業前に話し合って担当を決める）について把握・検証することができた。

宮沢地区では、平成 20 年度の「雪害による犠牲者発生の要因等総合調査」（国土交通省・内閣府）における試行実験と平成 21 年度の本実験の 2 カ年にわたり共助による地域除雪（一斉除雪）を行うことで、実行委員会に運営ノウハウが蓄積され、関係機関とのネットワークも構築されてきた。活動に必要な各種道具・備品類（ヘルメット、スコップ、スノーダンプ、のぼり旗、ロープ、安全帯、軍手など）もそろってきており、これらは宮沢地区公民館及び市野々公民館で保管され、必要な時に貸し出しができるようになっている。

今後の方向性として、今回の参加者アンケートの結果をみても、8 割以上が「続けていきたい」と回答しており、実行委員会としても、できれば毎年、宮沢地区内の異なる自治会で共助による地域除雪の活動を継続し、活動の定着化を図るとともに、地区全域に普及・浸透させていきたいという意向である。

また、実際に地域除雪活動を立ち上げる場合、特定の人に過度な負担がかからないように、自治会単位の実行的な組織づくりが重要であり、地域住民からは自主防災組織の活用や連携も提案されている。

今後の課題は、地域の高齢化と担い手不足への対応であり、参加者アンケートの結果でも、9 割以上が「地域の高齢化が進み、活動の参加者や担い手が不足する」を課題としてあげている。したがって、担い手が比較的多い今の時点から、将来に向けた準備として共助による地域除雪（見守り、声かけ、助け合い）の習慣をつくり、活動日には地区外に住んでいる家族等も担い手として参加させるような展開が期待されている。

山形新聞
平成 22 年 2 月 22 日（月）
朝刊

共助の除雪 効果は

尾花沢 宮沢地区 手引きに添い〝実験〟

地域住民が助け合いながら、安全で効率的な除雪作業の確立を目指す「共助による地域除雪実験」が21日、尾花沢市の宮沢地区で行われた。

先の「平成18年豪雪」では、除雪作業中の雪害などによって全国で152人が犠牲になった。国土交通省は、その教訓を生かすため「共助による地域除雪の手引き」を策定した。手引きでは、犠牲者の約8割が単独で雪処理を行っていたことを指摘し、雪害による犠牲者を減らすために、地域ぐるみで手順やルールを定め、住民が協力して同時に除雪を行うことが重要としている。

この日は住民30人が参加。手引きに定められた現場責任者、除雪作業従事者、交通誘導員、救護員、記録員などの役割を決めた上で、雪処理作業中を示すのぼり旗を道路脇に設置し、地区内3カ所で作業を行った。

作業終了後、市野々公民館を会場に参加者による意見交換会が開かれた。参加住民からは「協力して除雪することで作業が楽になる」「そばを通行するドライバーが、のぼり旗を見つけて減速してくれた」「地域住民の間で作業時間を調整するのは大変だ」などの意見が出た。国交省は今後、今回の取り組みを手引きの検証と改良に役立てる。

住民が実行委員会（会長・石山忠芳宮沢地区区長会会長）を組織し、主催した。

地域住民が協力して安全な除雪作業を体験した＝尾花沢市市野々

市報・おばなざわ
平成 22 年 3 月 15 日発行

一斉雪片づけ実施中
共助による地域除雪実験

2月21日、「共助による地域除雪実験」が市野々地区で行われました。これは国土交通省が策定した「共助による地域除雪の手引き」を検証するもので、地域住民が助け合いながら、安全で効率的な除雪作業を目指します。犠牲者の8割が1人で除雪作業を行っていたというデータから、地域内で手順やルールを決め、協力して除雪を行うことで事故を減らそうというもの。この日は住民30人が参加し、地区内3ヶ所で作業を行いました。

宮沢地区公民館だより
平成 22 年 3 月 15 日発行

みやさわ

発　行
宮沢地区公民館
宮沢地区振興連絡協議会
尾花沢市大字押切一番地
TEL.FAX. 22-0433
編　集
「みやさわ」編集委員会

国交省の地区共助による地域除雪実験

市野々・岩谷沢がモデル
「安全な雪下ろし」宮沢が手本

近年、地域の高齢化進行にも関連し、雪下ろしによる死亡事故が多発している。国・県としても安全な雪下ろしの推進と地域の高齢化に対応した除雪対策が急務となった。宮沢地区では四年前から「雪プロジェクト」を立ち上げ安全な雪下ろしビデオの制作など全面協力してきた。昨年の行沢、中島地区に続き、二月二十一日、市野々、岩谷沢両地区から四十名が参加して実施された。

（上）市野々公民館前での作業前打ち合わせ

（上）市野々での共助除雪

（下）岩谷沢での共助除雪

雪下ろし事故の八割が単独作業であることから、地域ぐるみで手順やルールを設け、近所の住民が協力して同時に雪処理を行うことによって犠牲者を無くする、今回はその実証実験である。

作業終了後市野々公民館で三分科会に分かれて意見交換を行った。自主防災組織の充実や除雪機の安全な操作、除雪中を示すのぼり旗の設置、作業者の服装は他から良く見える色にする。などが話された。最後に国交省の大村さんから総括と謝辞が述べられた。

３－２　岐阜県高山市高根町（野麦）における実証実験

第 2 章の集落の雪処理に関する対応方針に基づき、岐阜県高山市高根町において、共助による地域除雪の実証実験を実施した。実験の内容及び結果等を本節にて整理する。

（1）対象地域の状況

岐阜県高山市高根町は、高山市の南東、中心部から約 35km の距離にあり、486 人、229 世帯が居住している（平成 21 年 7 月 1 日現在）。実験の対象個所である野麦地区は、高根町中心部からさらに約 20km、長野県との県境の山間部に位置し、平年の積雪が 1.5m程度となる。

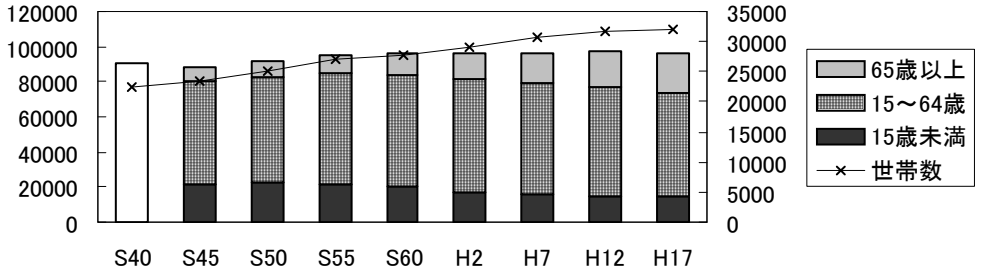
高山市では、除雪作業が困難な世帯に対する支援は、高山市社会福祉協議会が対応しており、第一に家族や親戚に相談、第二に地域や民生児童委員に相談、第三に除雪業者を探すように呼びかけ、それらが無理な場合は市あるいは社会福祉協議会に相談してもらい、必要に応じて除雪ボランティアを派遣する体制をとってきた。しかし、過疎化・高齢化の進展に伴い、地域コミュニティの共助による対応や地域内における除雪ボランティアの確保が年々難しくなってきている。

そこで、高山市社会福祉協議会が実施主体となり、野麦地区を対象に、地区外からのボランティアを受け入れ、地域住民と一緒に高齢者世帯の雪下ろしや家屋周辺の除雪作業を行う実験を実施することとした。

図表 3－14　岐阜県高山市の概況

■高山市　市町村データ		位置図
特別豪雪地帯指定	旧荘川村の区域	
過疎地域指定	旧清見村、旧荘川村、旧久々野町、旧朝日村、旧高根村、旧上宝村の区域	
人口（H17）	96,231 人	
高齢者割合（H17）	23.9%	
世帯数（H17）	32,174 世帯	
冬期間累計降雪量	435cm（H18 冬期） 77cm（H20 冬期）	
年間最大積雪深	229cm（H18 冬期） 40cm（H20 冬期）	
集落数	164 集落	

人口及び世帯数の推移



注）・人口、高齢者割合、世帯数は、平成 17 年国勢調査に基づく。
・冬期間累計降雪量及び年間最大積雪深（平成 18 年冬期、平成 20 年冬期）は、豪雪地帯基礎調査に基づく。
・集落数は、平成 20 年度豪雪地帯における集落の状況に関するアンケート調査に基づく。

野麦地区は、15 世帯、32 人が居住する山間集落である。13 世帯が高齢者世帯、うち 7 世帯が一人暮らしであり、高齢化が著しく進行している。平成 21 年度冬期は、高齢者世帯のうち 7 世帯が、高根町の冬期居住施設（冬季高齢者ファミリーホーム「のくとい館」：元教員住宅）に入居している。

このように野麦地区は 8 割以上が高齢者世帯であり、自力での除雪作業が困難な世帯も多く、高山市内に家族が住んでいる世帯では、週末に子どもが来て除雪作業を行っている。また、高根町には有償で除雪ボランティアを行う「雪下ろし隊」があり、家族に頼めない世帯は雪下ろし隊に除雪作業を依頼している（1 時間 1500 円）。

図表 3－15　高山市高根町野麦地区の概況

項　目	野麦地区
地域区分	山間地
集落類型	基礎集落
人口	32 人
世帯数	15 世帯
うち高齢者世帯数	13 世帯
平年の積雪量	約 150cm
高根支所までの距離	約 20km

注）人口、世帯数、高齢者世帯数は、H22.2 時点の現状に基づく。

図表 3－16　高山市高根町野麦地区の位置

(2)実証実験の実施内容

①本実験の趣旨

平成 20 年度に国土交通省都市・地域整備局で作成した「共助による地域除雪の手引き ～安全・効率的な雪処理方策マニュアル～」を参考に、高山市高根町の野麦地区（地区内では雪処理の担い手確保が困難な地域）において、あらかじめ活動日を定め、地区外から担い手（除雪ボランティア）を確保し、地域住民と協力して、一斉に高齢者世帯の家屋を除雪することにより、除雪作業における安全性・効率性の向上及び地域防災力の向上等を図る。また、活動後にアンケート調査を実施し、実験の効果や課題等を把握・検証するとともに、今回の成果を共助による地域除雪の手引きの改訂に反映させる。

＜本実験の主な検証項目＞

・地域における準備・調整の手順
・実施体制及び役割分担のあり方
・安全管理係（事故が起きないように安全に気を配る人）の必要性
・安全かつ効率的な除雪活動のためのポイント
・地区外からの担い手受け入れのためのポイント
・地区外の除雪ボランティアからみた共助による地域除雪の効果・評価
・活動の継続に向けた課題、今後の方向性　　等

②実施体制

高根町野麦地区における地域除雪実験の実施にあたり、高山市社会福祉協議会が実施主体となり、**図表 3－17** のような実施体制と役割分担を構築した。除雪ボランティアの募集は、高山市社会福祉協議会から高山市ボランティア連絡会（高山市内の各種ボランティア団体で構成される連絡調整及びネットワークづくりのための組織、現在は 27 団体が参加）を通じて関連団体に案内を出したり、民生児童委員に呼び掛けるなどして行った。

図表 3－17　高山市高根町野麦地区における地域除雪実験の実施体制

主　体	主な役割
高山市社会福祉協議会	実験の実施主体 ・活動の企画・運営 ・参加者（除雪ボランティア含む）の募集・登録 ・参加者の移送（集合場所と作業場所の往復） ・地元（実施地域）のコーディネート ・除雪用具の準備 ・当日の安全管理係
高根町野麦地区住民（3人）	担い手の受入れ、除雪作業の指示
除雪ボランティア （高山市内14人、高山市外5人）	当日の除雪作業

③実施日時・スケジュール

共助による地域除雪実験の実施日時及び当日スケジュールは、以下のとおりであり、平日の午後、2 時間程度の除雪作業を行うように設定した。

○実施日：平成 22 年 2 月 16 日（火）
○時　間：12:30～16:15
・12:30～13:00　高山市高根福祉センター集合
　　野麦地区（現地）へ移動
・13:00～13:10　野麦地区到着
　　作業説明、班分け（3 班）
・13:10～15:15　高齢者世帯の除雪作業（各班 1 軒ずつ）
・15:15～16:00　後片付け、移動
・16:00～16:15　高山市高根福祉センター到着
　　感想、閉会

④実施までの準備

実験の実施にあたり、高山市社会福祉協議会では、担当者を決めて平成 22 年 1 月から本格的な準備を始めた。除雪ボランティアの募集は、実施日時を決めた後、高山市ボランティア連絡会等を通じて、1 月後半から開始している。

除雪の対象個所となる野麦地区に対しては、2 月に入ってから、社会福祉協議会の担当職員が区長に趣旨説明及び除雪ボランティア受け入れの相談に伺っており、実験日に一緒に除雪作業ができる地元住民に協力を依頼し、除雪ボランティアへ作業指示を出してもらうよう手配している。

実際にどの世帯の除雪作業を行うかは、雪の降り方、積もり方をみて判断する必要があるため、実験日の 3 日前に担当職員が野麦地区の状況を確認し、最も雪が残っている高齢者世帯 3 軒を選び、世帯主に直接話をして除雪ボランティアによる作業の調整を行った。

事故の発生に備えて保険にも加入している。社会福祉協議会では、通常、福祉活動やボランティア活動においては、ボランティア活動保険や行事保険に加入しているが、これらの保険では雪下ろし作業は対象外となるため、今回の活動については民間保険会社に相談し、傷害保険に加入した。

⑤実験当日の活動

共助による地域除雪実験の当日、参加者は高山市高根福祉センターに集合し、社会福祉協議会で用意したマイクロバス等に分乗して野麦地区に移動した。

野麦地区では、参加者に対して作業内容と注意事項の説明を行い、作業現場の状況や除雪ボランティアの経験などを考慮して、1 班 5～10 人で 3 班に分かれ、それぞれの作業現場（高齢者世帯）へと向かった。

当日の参加者	
・野麦地区の住民	3 人
・高根町内の除雪ボランティア	4 人
・高根町外の除雪ボランティア	15 人
（うち高山市内 10 人、高山市外 5 人）	
・高山市社会福祉協議会職員	4 人

除雪ボランティアは、野麦地区の住民から、どこの雪をどこに移動させるのか、どのような順番で除雪するのか、誰がどこから除雪するのかなどの作業指示を受け、スコップとスノーダンプを使って除雪作業を行った。屋根雪下ろしの経験者は屋根の上で作業を行い、未経験者は住宅周りを除雪するなど、作業分担し効率的に進むよう配慮している。

また、作業の安全確保（声かけ、見守り等）を担う安全管理係をそれぞれの現場に配置し（高山市社会福祉協議会職員 4 人が担当）、参加者に声をかけたり、作業状況を見守ったり、はしごを押さえて固定するなど、事故が起きないように注意して安全な除雪作業に気を配った。

適宜休憩（水分補給）をとりながら、当初の予定通り 2 時間程度で作業を終了した。

ベテランと未経験者の共同作業

地区住民から指示を受けての作業

見守り合いながらの作業

道具の使い方の確認

屋根から下ろした雪の排雪

雪で埋もれた玄関先通路の確保

作業終了後、後片付けをしてから、再びマイクロバス等に乗って高山市高根福祉センターに移動し、参加者から今回の活動についての感想や意見を発表してもらい、閉会・解散した。貴重な経験になった、機会があればまた参加したい、雪が硬くて大変だったといった声が聞かれた。

除雪した世帯と参加者との交流（休憩時間）

参加者からの感想発表

(3)実証実験の結果　－参加者アンケート調査の結果－

共助による地域除雪実験において、野麦地区以外から参加した除雪ボランティアを対象に、活動の満足度や効果、受け入れ体制や役割のあり方、今後の意向等を把握するため、以下のとおり、アンケート調査を実施しており、結果について整理する。

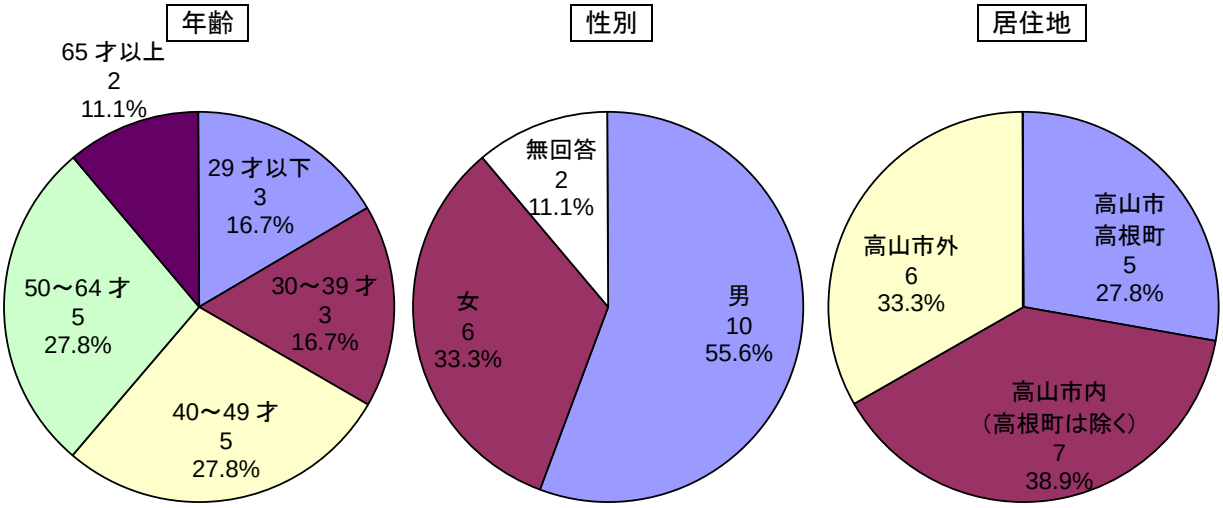
【調査概要】
- 調査期間：平成 22 年 2 月後半～3 月上旬
- 調査方法：高山市社会福祉協議会を通じて、共助による地域除雪の実験に参加した地区外からの除雪ボランティアに調査票を配布。回答した調査票は高山市社会福祉協議会にて回収し、一括で返送。
- 調査対象：実験に参加した地区外からの除雪ボランティア　19 人
- 回 収 数：18 人

【調査結果の要点】

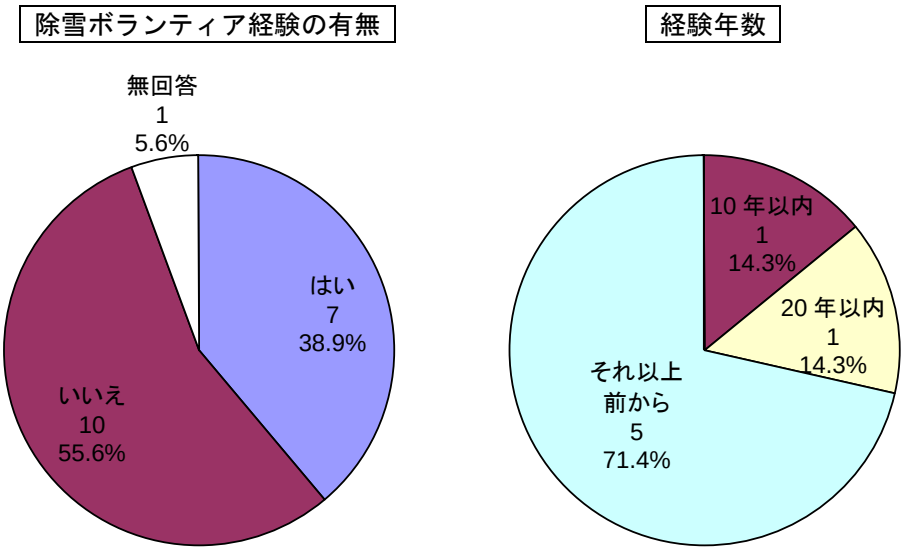
- 参加者の年代及び居住地（高根町、高根町を除く高山市内、高山市外）はともにほぼ均等である。（**図表 3－18**）
- 参加者の半数以上（55.6%）は除雪ボランティアの経験がない人であった。一方、除雪ボランティアの経験者の多くは（71.4%）、20 年以上の経験年数がある。（**図表 3－19**）
- 屋根の雪下ろしを行っている人は約 6 割（61.1%）、自宅まわりや玄関先の除雪を行っている人は約 7 割（72.2%）である。作業中の人数をみると、屋根の雪下ろしは「自分ひとりで」と「同居の家族と」がともに半数近く（45.5%）、自宅まわりや玄関先の除雪では「自分ひとりで」が約 6 割（61.5%）である。（**図表 3－20**）
- 今回の活動に対して、「満足」は 1 人であったが、「やや満足」は約 6 割（61.1%）であり、除雪道具の使い方を教えてほしい、住民と話す機会があるといい、作業時間をもう少し長く、もっと人数が多い方がいいといった意見がみられた。「やや不満」は 1 人であり、時間が少なすぎたという理由であった。「どちらともいえない」の理由では、特定の世帯を除雪することによる地域住民の不公平感への懸念があげられている。（**図表 3－21**）
- 除雪ボランティアに参加する上で重要と考えることは、「事前の連絡（日時、場所、持ち物、内容等）」が「特に重要である」と「重要である」を合わせて 8 割以上（83.3%）と最も多く、次いで「除雪作業中の声かけ、見まもり」（77.8%）、「地元の人との交流、会話、コミュニケーション」（72.2%）、「けがや事故に備えた手当て、救急の用意」（72.2%）、「適切な作業・役割の配分」（72.2%）、「作業場所までのアクセス、移動手段の確保」（72.2%）が 7 割を超えている。また、「特に重要である」の割合でみると、「事前の連絡（日時、場所、持ち物、内容等）」及び「安全に除雪作業するための技術的な指導」がともに約 4 割（38.9%）と高くなっている。一方、「交通費等の必要経費の支払い・支給」や「宿泊場所の斡旋・紹介」については重要という回答は少なかった。（**図表 3－22**）
- 高山市内の参加者では、地域（野麦地区）のためにという思いで参加している人が複数みられた。高山市外の参加者では「雪の不安や苦労を知りたかった」、「雪かきを経験したかった」といった理由が多かった。（**図表 3－23**）
- 割り当てられた作業内容（役割）は、「適切だった」が半数（50.0%）、「どちらともいえない」がほぼ半数（44.4%）、「適切ではなかった」は回答がなかった。（**図表 3－24**）

- 事故が起きないように安全に気を配る人（安全管理係）の配置については、「必要である」が 8 割近く（77.8%）であり、「必要はない」とする回答はなく、重要な取組であることがわかった。気配りの内容は、監視、技術指導、雪下ろしの場所の指示、道具の使い方の指導、作業している人の周囲の状況確認などがあげられている。（**図表 3－24**）
- 今後の参加意向は、3 分の 2（66.7%）が「参加したい」と回答している。高山市内の参加者からは雪で困っているところであれば参加したいという意見、高山市外の参加者からは地元住民との交流を期待する意見が複数あった。（**図表 3－25**）

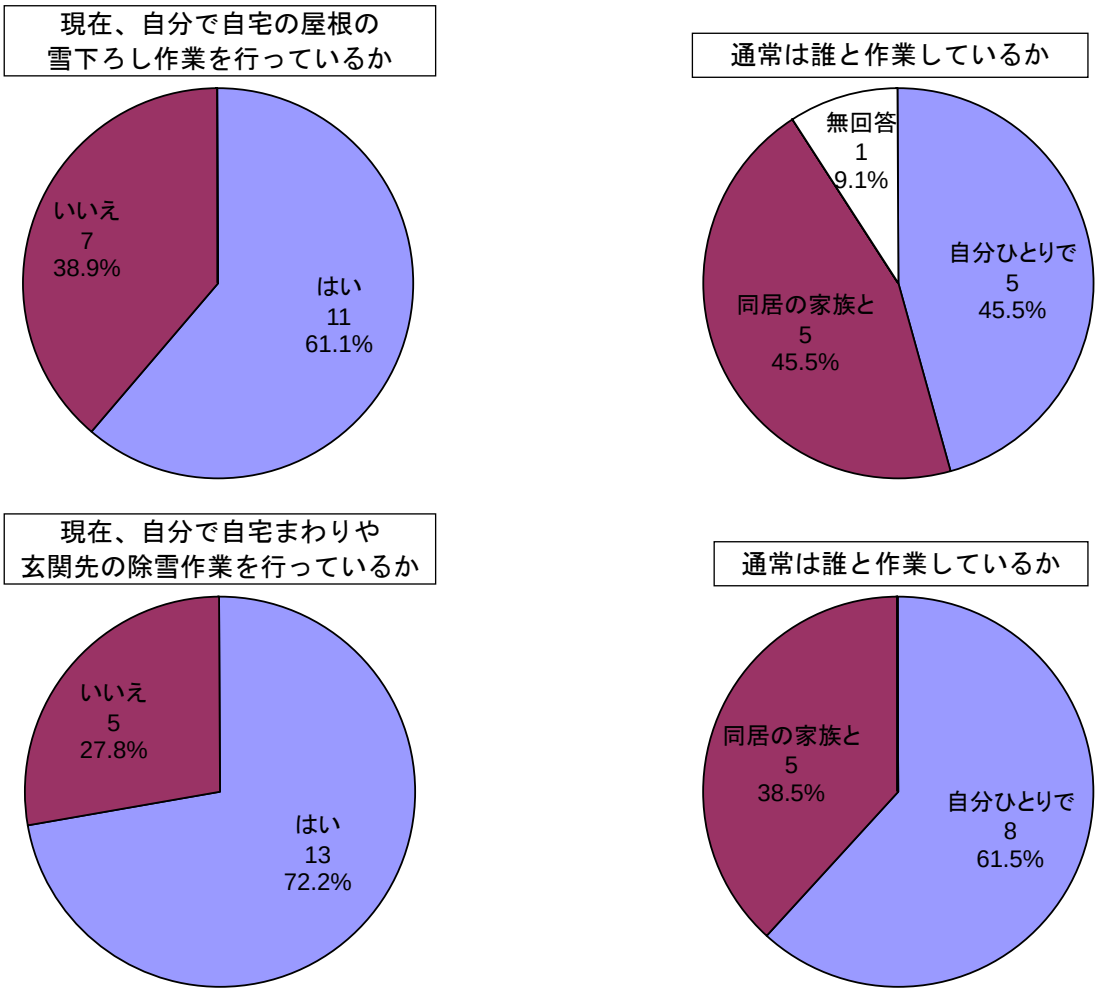
図表 3－18　回答者の属性（高根町実証実験）



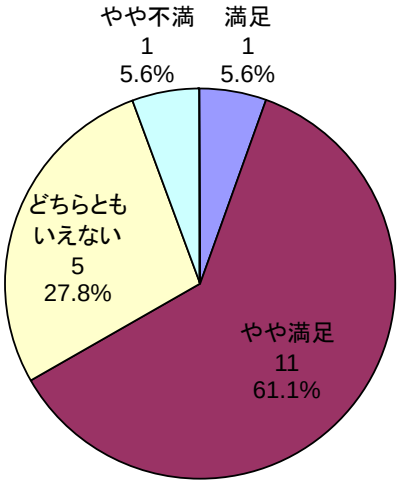
図表 3－19　除雪ボランティアの経験（高根町実証実験）



図表 3－20　自宅の除雪状況（高根町実証実験）



図表 3－21　活動の全体的な満足度（高根町実証実験）



【「満足」の理由】

・いつもは一人で屋根に上がり、ただひたすら下ろすだけだが、何人もの人がいると早く片付き、次の作業に移れてよかった。

【「やや満足」の理由】

・基本的な除雪道具の使い方を教えてほしかった。(2)
・あまりに雪が硬かった。(2)
・除雪についての知識や地区ごとの方法などを知ることができた。(2)
・道具の正しい使い方は学べたが、もう少し住民と話す機会があるとよかった。
・誰が地元の人か分からなかった。
・作業時間が半日というのは適切だったと思う反面、時間が過ぎるのが早く、もう少し作業時間が長ければとも思った。
・短い時間の中でいろいろと経験することができ、現地の方々とのふれあう時間も得られた。
・事前の下見は行ったのか、道具等は適当だったのか。
・もっと人数が多いほうがよい。

【「どちらともいえない」の理由】

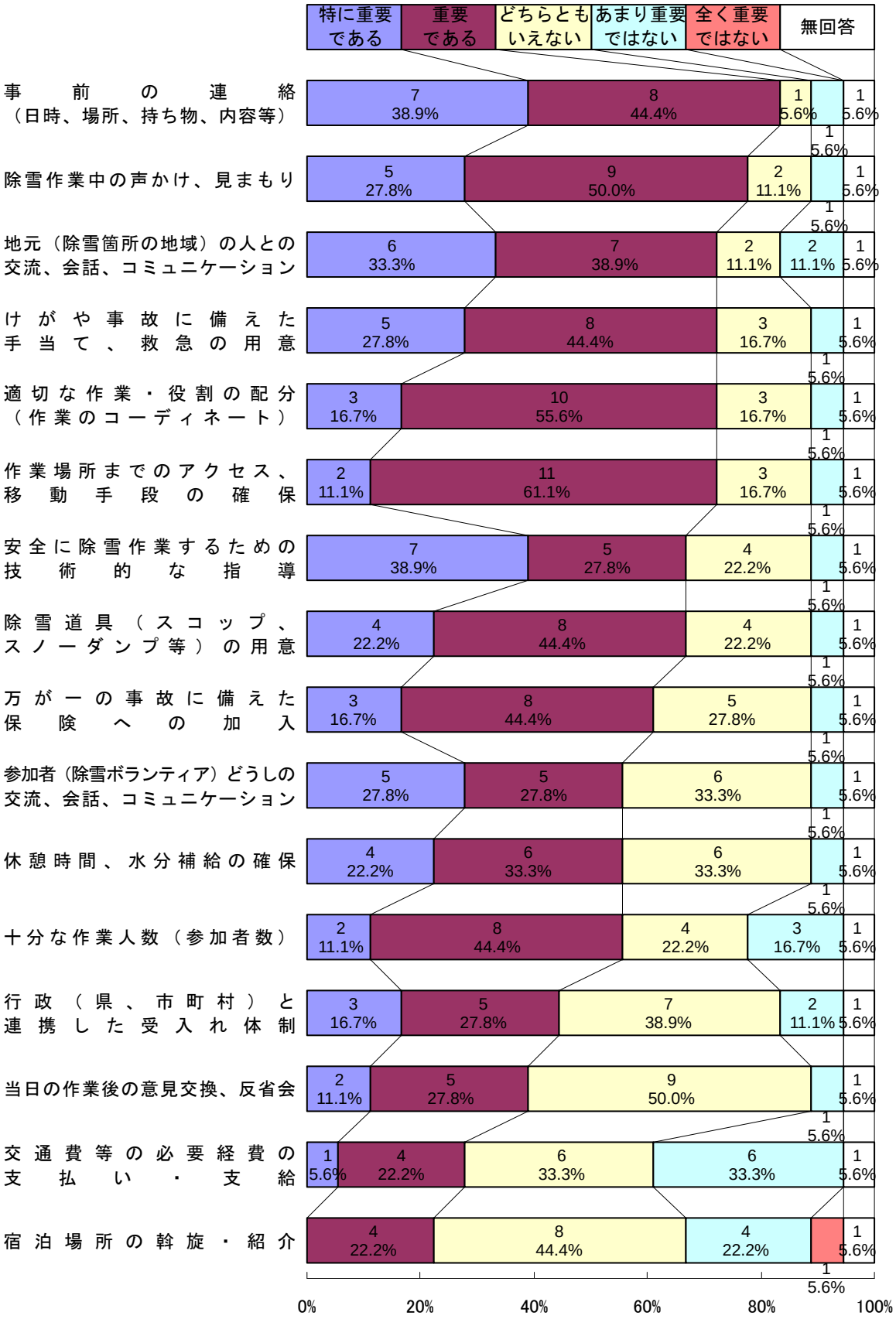
・生活の一部である。(2)
・雪下ろし作業はそれぞれが行うものという習慣があるので、不公平が生じることが懸念される。
・初めての経験であったため、良いか悪いか分からない。

【「やや不満」の理由】

・時間が少なすぎた

図表 3－22　除雪ボランティア活動に参加する上で重要なこと（高根町実証実験）

※「特に重要である」と「重要である」を合わせた割合の高い順に並び変え

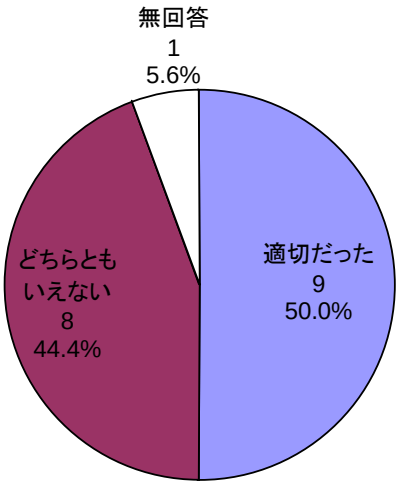


図表 3－23　参加した理由（高根町実証実験）

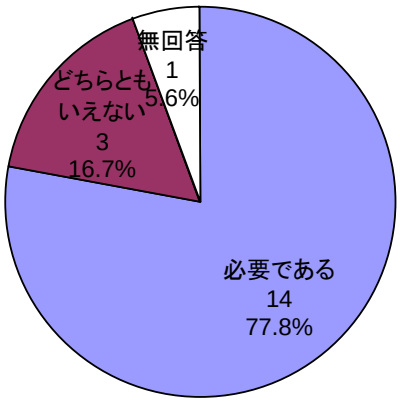
・雪国や中山間地域に住む人たちの冬の暮らし、雪の不安や苦労を知りたかったため。(3)
・除雪の経験があまりない、雪かきをしたかった（2）
・自宅等での経験があるので、協力できればと思い、参加した。
・今回の経験を今後活かすことができる。
・経験は何事にも変えられないと日々思うので、今の自分にとって何か得られるものがあれば、と参加した。
・ボランティア活動であること。
・地域のため。
・知人から声をかけられて参加した。

図表 3－24　役割の適切さ、安全に気を配る人の配置の必要性（高根町実証実験）

割り当てられた作業内容（役割）は適切か



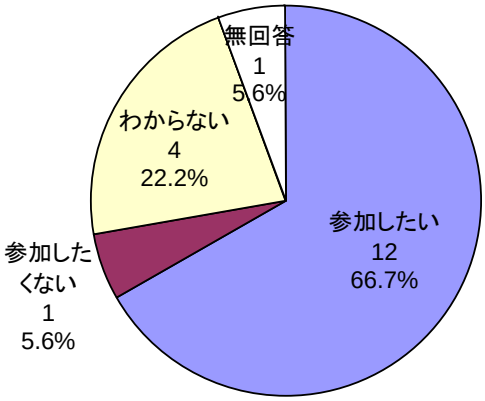
除雪ボランティア活動を行う場合、事故が起きないように安全に気を配る人の配置の必要性



【気配りの内容（「必要である」と回答）】
・監視できる人を配置する。(3)
・どこまでが屋根か分からないので、雪を落とす場所などを下から指示してほしい。(2)
・正しい技術を教える。
・作業の役割の配分を適切に行う。
・例えば、屋根の雪はどのくらいまで下ろしてよいのか、体験してみないと分からない危険ラインなどを知らせてくれると分かりやすい。
・初心者が参加することも多いと思うので、全体を把握し、安全対策に気配りしてくれる人は必須である。
・道具は何を使えばよいのか、どこから始めるとよいのかを指示する。
・落とす先に人がいないか確認する。

【「どちらともいえない」の理由】
・事故が起きないようにだけでなく、事故が起きたときに迅速に対処できる人は必要だと思う。
・安全は個人で確保するもの。

図表 3－25　今後の参加意向（高根町実証実験）



【「参加したくない」の理由】
・自分のところで手一杯。

【どのような除雪ボランティア活動であれば参加したいか】
・地域の方たちとの交流の時間があるとよい。(2)
・高齢者を支援できるような除雪ボランティア。(2)
・地元の人と一緒に除雪するボランティア、その後に話をする機会があるといい。
・地元のお祭りやイベントの日程と合わせたものなど、訪れた土地の文化や歴史等を知るきっかけなどもあれば、よりよいと思う。
・実践を交えた除雪体験。
・ただの除雪をしてくれる作業員の一人ではなく、現地の生活を知り、お互い思いやり、信頼関係を結べるような活動に参加したいと思う。
・自助、共助では困難なところ。
・保険等に加入してあると安心して参加できる。
・積雪量、圧雪等、状況が分かると作業もはかどるので、地元で協力できればよいと思っている。
・本当に困っている方、一人で住んでいる方（子どもがいる方は別)。
・あまり考えたことはないが、どうしても困っているのであれば参加する。
・そのときでなければ分からない。

図表 3－26　自由意見（高根町実証実験）

・雪かきに対して持っていたイメージがかなり変わった。雪かきは想像以上に危険が伴い、命をなくす方が多くいること、高齢化や担い手不足などで、とても重大な社会問題になっていることも知ることができ、とてもよい勉強になった。
・時間的な制約がある中、あれだけのことができたことにとても満足している。今後も多くの若者が参加し、これをきっかけに地域との交流ができればよいと思っている。
・自宅の雪下ろしや雪またじは、ほとんどが一人や二人で行っており、早く終えることが一番という気持ちでいつも除雪作業をしている。今回、初めて事前準備をしてとりかかった。大事なことなのだが、自宅の場合はその余裕もなく行っている。
・高根の方に住んでいる人は大変だと思う。
・野麦の人たちは大変だと思うし、若い人も少ないと聞き、今後どうなるのか心配である。

(4)実証実験の成果と今後の課題・方向性

高山市高根町野麦地区で実施した共助による地域除雪の実証実験について、本節で整理した内容に基づき、地域住民、除雪ボランティア、社会福祉協議会のそれぞれの立場から成果（効果）を整理すると、**図表 3－27** に示すとおりである。

図表 3－27　各主体の立場からみた実証実験の成果（効果）

主体	実証実験の成果（効果）
地域住民 （野麦地区）	・地区内では雪処理の担い手確保が望めない状況にあって、地区外の除雪ボランティアと一緒に作業をするという活動が、将来を考える上でよい経験となった。 ・除雪を行った高齢者世帯では、子どもが時々週末に雪処理に来ているが、それだけでは処理しきれなかった積雪を短時間で除雪したことに感謝していた。除雪ボランティアとの交流の機会（会話、お茶のみ）を喜んでいた。 ・自宅を留守にして冬期居住施設に入居している住民にとっては、除雪作業をしてもらったことで安心感を抱いた。
除雪ボランティア （参加者）	・高山市外の雪に不慣れな除雪ボランティアにとっては、除雪作業を体験するよい機会となった。 ・大人数で除雪作業することの良さ（安全性、効率性、楽しさ）を実感することができた。
社会福祉協議会 （実施主体）	・除雪作業が困難な世帯への支援は、高山市社会福祉協議会でも重要な課題の一つであり、今後、除雪ボランティアの広域的な活用・派遣の視点から様々な課題を把握することができ、有意義な実験となった。 ・除雪を介した冬期の地域間交流という可能性を見出すことができた。

また、本実験を通して、豪雪地帯において共助による地域除雪を推進する上で、次のような知見を得ることができた。

＜共助による地域除雪を推進する上での主な知見＞

- 地区内では雪処理の担い手確保が困難な地域において、共助による地域除雪を推進するための一つの手法を検証することができた。
- 社会福祉協議会が実施主体となって、地元地域と調整を図りながら、共助による地域除雪を進める場合の方法を実証することができた。
- 地区外からの除雪ボランティアを受け入れる上で重要な事項を、参加者の視点から把握することができた。特に「事前の連絡」、「除雪作業中の声かけ、見まもり」、「地元の人との交流、会話、コミュニケーション」、「けがや事故に備えた手当て、救急の用意」、「適切な作業・役割の配分」、「作業場所までのアクセス、移動手段の確保」、「安全に除雪作業するための技術的な指導」が重要視されている。
- 安全管理係（事故が起きないように安全に気を配る人）を配置し、その必要性・重要性、望まれる具体的内容について把握・検証することができた。

実施主体である高山市社会福祉協議会では、今回が初めての取組で、実験までの準備期間が短かったこともあり、「実施主体側の関係者間で連絡・調整が十分に行き届かず、窓口や責任があいまいになってしまった」、「行政機関（高山市高根支所）や野麦地区との連携、合意形成が十分にできていなかった」、「高山市ボランティアセンターと実施体制を組み、ここを窓口にすればよかった」等の反省も聞かれた。

除雪作業が困難な世帯に対する支援は、高山市社会福祉協議会が対応すべき重要な課題の一つであり、このような活動を今後も継続的に実施していく意向である。また、今回の実験を通して、除雪ボランティアの活用による共助の仕組みづくりという視点から今後の課題や方向性が見えてきている。

除雪ボランティアに関する課題の一つとしては、地区間における不公平感である。これまでは住民自らの責任で対応していた自宅の除雪作業をボランティアが実施することで、「なんであの地区だけ」、「次はうちもやってほしい」といった反応が懸念される。

そのため、一つの展開方向としては、地区同士がしっかりと合意形成を図るとともに、各地区が地域除雪を実施するための組織・体制を形成していくことが重要であり、そのための働きかけを福祉委員（町内会の役職の一つで町内の見守り役・声かけ役等を担う。高山市内の各町内会に 1～2 名、合計 333 名）を核に進めていくことが検討されている。

さらに、今回の実験を 1 つのモデル事例として、地域懇談会等で情報発信することで、地域共助の意識啓発・普及のきっかけにしていきたいとしている。

３－３　新潟県十日町市枯木又地区におけるアンケート調査

本調査では、本章に掲載した尾花沢市宮沢地区及び高山市高根町における実証実験の他に、新潟県十日町市枯木又地区（11 世帯、51 人、高齢化率 29.4%、平成 20 年住民基本台帳より）の住民を対象に、共助による地域除雪に関するアンケート調査を実施しており、その結果を本節にて整理する。

【調査概要】

・調査期間：平成 22 年 2 月
・調査方法：十日町市担当課へ調査票を一括送付し、担当課にて枯木又地区の住民（各世帯）に調査票を配布。回答した調査票は担当課から一括で返送。
・調査対象：枯木又地区の住民（10 世帯に配布）
・回 収 数：7 世帯

【調査結果の要点】

- 回答者全員が自宅の屋根の雪下ろしと自宅まわりや玄関先の除雪作業を行っている。作業中の人数をみると、屋根の雪下ろしでは「同居の家族と」が 4 人と比較的多いが、自宅まわりや玄関先の除雪作業では 6 人が「自分ひとりで」行っている。
- 共助による地域除雪の必要性は、5 人が「必要である」としており、「必要はない」とする回答はなかった。主な理由としては、公共・共有施設の除雪作業には共助が不可欠との認識があげられる。
- 共助による地域除雪を行う場合、関係機関・団体との連携は、「必要である」が 2 人、「必要はない」が 1 人である。担い手確保で行政（市）等に支援を望むために連携が必要とする意見や、集落の自立性が高いところでは必要ないという意見が出ている。
- 事故が起きないように安全に気を配る人（安全管理係）の配置については、「必要である」が 1 人、「どちらともいえない」が 4 人であった。共助による除雪作業に住民が慣れており、お互いに注意し合っているため、強い必要性を感じていないようである。また、配置する場合も事前に登録したり、当番制で決めるのではなく、作業前に話し合って決めるという回答である。
- メンバーで役割を決めておくことについては、5 人が「必要である」、1 人が「必要はない」であり、事前の役割分担の必要性を感じている人が多い。必要はない理由としては、その時のメンバーで適宜判断することが望ましいという回答であった。

【アンケートの集計結果（N=7）】

〇回答者の年齢

39 才以下	0	（0.0%）
40～49 才	1	（14.3%）
50～64 才	3	（42.9%）
65～74 才	3	（42.9%）
75 才以上	0	（0.0%）
合計	7	（100.0%）

〇回答者の性別

男	7	（100.0%）
女	0	（0.0%）
合計	7	（100.0%）

〇現在、自分で自宅の屋根の雪下ろし作業を行っているか

はい	7	（100.0%）
いいえ	0	（0.0%）
合計	7	（100.0%）

・通常は誰と作業しているか

自分ひとりで	3	（42.9%）
同居の家族と	4	（57.1%）
別居の家族と	0	（0.0%）
集落の人と	0	（0.0%）
その他	0	（0.0%）
合計	7	（100.0%）

〇現在、自分で自宅まわりや玄関先の除雪作業を行っているか

はい	7	（100.0%）
いいえ	0	（0.0%）
合計	7	（100.0%）

・通常は誰と作業しているか

自分ひとりで	6	（85.7%）
同居の家族と	1	（14.3%）
別居の家族と	0	（0.0%）
集落の人と	0	（0.0%）
その他	0	（0.0%）
合計	7	（100.0%）

問１　共助による地域除雪は必要か

必要である	5	（71.4%）
どちらともいえない	1	（14.3%）
必要はない	0	（0.0%）
その他	0	（0.0%）
無回答	1	（14.3%）
合計	7	（100.0%）

＜「必要である」理由＞

・主に分校や共有施設については、個人では難しい。
・一人では限界があり、雪が降り続いたり病気などしたとき困る。
・やらなくてはいけない公共物や道路は一人でするより共同でするのが良い。
・公共の建物は大きいため、多数でやらなければならない
・山間地では「共助」の考え方は大切であり、冬期間だけではなく、年間を通して農道や水路、ため池などの維持管理には不可欠だと思うので、良い習慣は大事にしていきたい。

問２　共助による地域除雪を行う場合、関係機関・団体との連携は必要か

必要である	2	（28.6%）
どちらともいえない	2	（28.6%）
必要はない	1	（14.3%）
その他	0	（0.0%）
無回答	2	（28.6%）
合計	7	（100.0%）

＜連携が必要な機関・団体＞

・集落の高齢化が進み、人を集めるのが大変なので市や市民団体、消防などに手助けしてもらえれば良いと思う。
・市にお願いする。

＜「必要はない」理由＞

・今までにそのような連携がない。集落の自立機能がしっかりしている所では必要ないと思う。

問３　共助による地域除雪を行う場合、事故がおきないように安全に気を配る人の配置は必要か

必要である	1	（14.3%）
どちらともいえない	4	（57.1%）
必要はない	0	（0.0%）
その他	0	（0.0%）
無回答	2	（28.6%）
合計	7	（100.0%）

＜必要な気配りの内容＞

・個々の経験に基づいた作業手順を出し合い、マニュアル的なものを作り徹底するなど。

＜「どちらともいえない」理由＞

・集落の人は慣れていてそれほど必要とは思わないし、住民間でも注意し合っている。

問４　安全に気を配る人を配置する場合、どのような方法がよいか
（問３で「必要である」と回答した人を対象）

必要な知識やスキルを学び、事前に登録しておく	0	（0.0%）
除雪作業を行う前に、話し合って担当者を決める	1	（100.0%）
当番制（交代）で担当者を決める	0	（0.0%）
その他	0	（0.0%）
合計	1	（100.0%）

問５　共助による地域除雪を行う場合、メンバーで役割を決めておくことは必要か

必要である	5	（71.4%）
どちらともいえない	0	（0.0%）
必要はない	1	（14.3%）
その他	0	（0.0%）
無回答	1	（14.3%）
合計	7	（100.0%）

＜必要な役割＞
・主に雪下ろしの日程や人員集めをする人が必要だと思う。
・年齢によって適度な作業が好ましい。
・自分たちの集落では、嘱託員がリーダーとなって行っている。

＜「必要はない」理由＞
・その時のメンバーで誰が適任かを判断することが望ましく、前もって決めておく必要はないと思う。

問６　自由意見
・一番必要なことは山間過疎地に住む人が増えるような政策だと思う。
・軒数が少なくなると共同作業も大変になってくるため、国、県、市の協力が必要かと思うが、頑張れるところまではやりたい。